

日常の表現への関心の生産から開かれる経験

— Multimodal Learning Note プロジェクトの概要報告 —

比留間太白

関西大学

背景

我々が社会的実践を営む日常世界は複雑である。まず、多種の生物群とそれら生物群を取り巻く環境との相互作用から構成されている生態系としての自然の複雑性がある。これに、我々が社会的実践を通して作り出した生産物が加わる。もちろん、生産物は生態系に作用するため複雑性は更に増す。また、生産物には生産を助ける道具も含まれる。道具は鋤や斧といった物質的道具ばかりではない。道具の使用法、手順書、生産ための設計書、生産過程の工学理論、工学理論の背景となる自然科学理論も含まれる¹⁾。

複雑であることは、単に上記のモノが入り交じって生じているわけではない。現代においては、単一の生産物に見えるようなモノには、すでに、材料、道具、道具の使用法、材料の理論等が畳み込まれている。たとえば、写真は光学理論や化学理論が畳み込まれた装置から生産されたものである（フルッサー、1999）。さらに、そのような写真は、マス・メディアや、最近では、SNS サービスを通して、世界に広く行き渡り、世界の複雑化に寄与する。もちろん、組織や制度、文化も世界の一部である。

このように複雑な世界を、我々は縮減して意味あることとして経験している。意味ある世界は、たとえば、「私は（行為者）報告書を（目的）書いている（過程）」のように、ある単位に分節化した対象として経験される。分節は世界の性質を反映して直接に形成されるのではなく、記号を媒介としている。記号の中でも言語は、我々が意味を形成するための主要な媒介である。ゆえに、“経験は言語を用いて我々自身が解釈している現実である（Halliday & Matthiessen, 1999, p.3）”とさえ主張される。

世界が記号を媒介とした経験として把握されているという立場から導きだされる含意は、ひとつには世界が多様であり得るという点である。“同じ”対象を異なって経験すること、境界が引かれ異なる世界として経験することが可能となる。もうひとつは、経験の多様性や多元的経験が記号とその使用によって作り出されるという点である。世界は多様多元であり得るが、一方で、共通の記号を共通に使用することによって、世界を共有することが可能である。反対に、異なった記号を使用すること、同じ記号でも異なって使用することによって、境界を生成することも可能となる。

我々は世界内において、多様な目標をもった社会的実践に参加している。社会的実践は、各実践における目標によって領域を異にする。社会的実践において記号を使用して意味を形成することは必須であ

る。社会的実践の参加者の間のコミュニケーションにおいて、また、共通する目標を立てることにおいて、先に述べたように、社会的実践の生産物においても、生産物が理論自体、または、生産物に理論が畳み込まれている場合のように、意味形成が関わっている。

世界の複雑性を縮減することが意味形成であるから、各々の社会的実践への参加という経験に境界線が引かれ、フラグメンテーション化することは十分あり得る。社会的実践に世界の複雑性にそのまま対処できない行為者が関わろうとするならば、必然ですらある。そして、現在の我々の社会的実践への関わりは、そのようになっているものと考えられる。たとえば、大学生は、授業、課外活動、アルバイト、インターンシップ、ボランティア、家庭生活といった社会的実践の諸領域に参加している。このとき大学生にとっての経験が領域を超えて連続するものであるのか、それとも非連続的なものであるのかということは、これらの社会的実践がどのように意味形成されているかに関わる。もし、学校での授業と他の活動領域が非連続的であるなら、学校での活動と他領域での活動は、異なるものと解釈されていることになる。領域が非連続的であるなら、学校で記憶した知識を他の実践において利用することすら思いつかないだろう。学習転移の問題である。このような、フラグメンテーション化に対抗しうる新たな学習活動モデルを探索しようとするなら、ひとつの方向は、境界を生み出している社会的実践における記号と記号の使用を探ることである²⁾。

経験の相違を記号とその使用の相違として捉えるなら、学習の転移が問題とされる社会的実践領域間において、記号とその使用が異ならなければならない。生活的概念と科学的概念（ヴィゴツキー、2001）の議論は、日常生活と学校における記号使用が異なっており、経験も異なっていることを示唆している。

Halliday（1998）は、日常生活と学校での経験の差異を文法的比喩（grammatical metaphor）という概念によって理論化している。科学的概念を表現するために利用されている科学論文や科学の教科書の語彙文法は、日常会話における使用とは異なっている。文法的比喩のひとつである名詞化は、日常生活では動詞によって表現され、過程として把握される世界を、科学においては、名詞によって表現し、詳細な検討対象とするための文法資源である。たとえば、心的機能は日常経験では過程である（「彼は友人の声を思い出せなかった」）が、認知科学では、名詞化（「彼の忘却」）され、さらに「記憶」という存在として空間的に把握され、その結果、その性質の検討が行われることになる。この時、友人の声を思い出せなかった主体としての「彼」は隠蔽され、「記憶」という仮想空間内における「友人の声」の所在が問題とされることになる³⁾。日常経験を表現する時の文法の使用と、科学的概念を表現する時の文法の使用が系統的に異なるのである。文法的比喩によって日常経験と科学的概念の距離は最大化されている（Halliday, 1998）。

学校での学習活動はこの距離の間に展開される。距離は2地点を結ぶことにより作られるのであるから、展開方向も2地点から出発することが可能である。ひとつは、科学的概念を慣れ親しんだ日常経験に翻訳していくという、いわば、上から下への方向である。もうひとつは、日常経験から出発して、科学的概念へと向かう下から上への方向である。方向性は価値中立であると考えられるが、主として教育的営みは前者の方向から、科学的営みは後者の方向から進んでいる。

日常経験の中で活動する者に日常経験に翻訳された科学的概念を提供するのみであるなら、新たな日

常経験が付加されるに留まる。日常経験を、それとは異なる意味構成原理から再構成し、経験することは、日常経験との距離を取ることであり、対象化することを可能とする。ヴィゴツキー（2001）が科学的概念の習得に見出していた自覚性と随意性はまさにこの対象化の機能と考えることができる。本稿で報告するプロジェクトは後者の方向からのアプローチを採用している。

我々は記号を生成することを通して経験を構成する。経験は決して単に記号の受容によって形成されるものではない。記号の受容は契機に過ぎない。普段、記号を受容するのみで、記号を生成しているように見えないのは、主として使用されている記号資源であるモードが、時間とともに減衰する音声言語や内言だからである。音声言語であっても、たとえば、物語の口承のように反復されるのを見るなら、記号の生成を通して、経験が構成されていることを実感することができるだろう。

ところで、経験の構成に寄与している記号は実は言語に限られない。太古の時代から人類は、文字よりも先に、壁に絵を描くという視覚的表現を利用して経験を構成してきた。一方で、言語以外の記号の生産はごく一部の人々に限られてきたのも事実である。言語ですら、書き言葉を多くの人々が生産できるようになったのは、識字教育が普及して以降である（ヴィンセント、2011）。言語以外の記号、特にマス・メディアを流通する絵や写真、映像、音楽の生産の多くは未だ一部の人々に限られている。

しかし、近年の情報技術革新とその急速な普及により、文字だけでなく、絵、写真、映像、音楽など、多様な表現を、その気になれば誰もが簡単に生産し流通することが可能となっている。現代は、経験構成に寄与するモードが多様となった時代であり、世界はマルチモーダルに構成することが可能となっている。

上述してきた言語に媒介された経験の構成をマルチモーダルに展開しようとしているのが、マルチモーダリティ論（Kress, 2009）である。マルチモーダリティ論においては、経験の意味は多モードに表現される記号の生産から構成され、我々は、他者もしくは自らが生産した記号への応答として、自らの関心に基づき、多モードの記号を産出して、意味を生産していると捉える。

このような世界において創造的、革新的に活動することを目指すならば、経験世界を構成するマルチモーダルな記号使用を対象化し、自覚性と随意性をもって操作することが必要となる。つまり、マルチモーダルな記号の使用を科学的概念化することである。本稿で報告する Multimodal Learning Note プロジェクトは、このような背景により企図された。

Multimodal Learning Note プロジェクト

Multimodal Learning Note プロジェクトは、学習者のマルチモーダルに構成されている日常に根ざした関心から出発して、日常経験の構成過程を対象化して、科学的概念化することを目的として、日常生活において得た興味関心をインターネット上にメモとして共有する Multimodal Learning Note（以下、Mull Note⁴⁾と呼ぶ）を中心としたプロジェクトである。

本プロジェクトにおけるターゲットとした科学的概念⁵⁾は、研究室の研究テーマである社会記号論に基づくマルチモーダリティ論であり、本プロジェクトの背景となる理論的基盤でもある。上述したように、マルチモーダリティ論においては、経験の意味は多モードに表現される記号の生産から構成され、我々

は、他者もしくは自らが生産した記号への応答として、自らの関心に基づき、多モードの記号を生産して、意味を生産していると捉える。本プロジェクトの参加者は、他者が生産した記号への応答として、自らの関心により、Mull Note への投稿を通した記号の生産に従事することになる。つまり、科学的概念が想定する世界へ参加しながら、科学的概念との結びつきを獲得していく構造となっている。

ネットワークへの書き込みと共有は、春学期には携帯電話からインターネット上のドキュメント管理システム（Evernote Corporation: Evernote）への投稿、投稿された記事をブログへアップロードするという方法で、秋学期には携帯情報端末（日本通信株式会社製 Light Tab）からインターネット上のノートシステム（Catch.com, Inc.: Catch）への投稿という方法で実現した。

参加者

私立大学において心理学を専攻するゼミに所属する3年次学生13名（女子9名・男子4名）

実施経過

プロジェクトは春学期、秋学期に実施された週1回のゼミの時間を中心として、表1に示す通り進行了した。

表1 Mull Note プロジェクトの経過

ゼミ		主なトピック
春学期		
2011.4.5	第1回	研究室のテーマおよび Mull Note の説明
2011.4.12	第2回	気になるメモの報告（以降継続）。気になるメモの対象を気になる説明および表現に限定
2011.4.26	第4回	検討するトランスダクションの決定
2011.5.31	第8回～	トランスダクションの事例発表
夏期休暇		
秋学期		
2011.9.20	第1回	Light Tab および Catch の運用開始
2011.9.27	第2回	大学内探索
2011.10.4	第3回～	輪読
2011.12.18	ゼミ合宿	Mull Note に関するインタビュー実施

春学期第1回ゼミでは、研究室の研究テーマと Mull Note プロジェクトの説明を行なった。Mull Note の説明では、参加者が日常、関心をもったこと、気になったことを、写真等などで記録（「気になるメモ」と呼称した）し、これに気になった時の印象をコメントとして付し、投稿するように指示した。

第2回ゼミより、その一週間に参加者が投稿した「気になるメモ」を、ゼミ開始時に見直すことを、春学期間第12回ゼミまで、合計11回実施した。見直しでは、特に投稿された内容についての解説や分析などは行わず、場合によって投稿者の説明（撮影場所や経緯等）が行なわれた。ゼミの主な活動は、マルチモーダリティ論のキー概念のひとつである、トランスダクションの事例の探索とその発表であった。また、第2回ゼミにおいて、ゼミの活動と投稿内容を関連づけるようにするため、気になるメモの対象を、気になる表現や説明に焦点化するよう指示を行なった。

秋学期第1回ゼミにて、Mull Note を携帯情報端末から Catch への投稿に移行した。第2回ゼミにて、投稿練習を兼ね、大学内で関心をもった対象の投稿を行なった。秋学期では、関心メモをゼミにおいて

見返すことは行なわなかった。また、気になるメモの対象の焦点化は明示せず、付加するコメントも気になった際の印象に限定せず、自由とした。秋学期のゼミでは、研究方法一般に関するテキストおよびマルチモーダリティに関連する心理学の研究論文の輪読を行なった。

秋学期に実施したゼミ合宿において、Mull Note プロジェクトへの参加者に対して半構造化グループインタビューを実施した。予め準備したインタビュー項目は、Mull Note のイメージ、Mull Note に対する感情、Mull Note への投稿、関心の生起、自身の変化についてであった。インタビューは、投稿数がほぼ同じとなる2名を1グループとして、著者が行なった。なお、インタビューに際しては、口頭ならびに書面において、内容とデータの使用を説明し、同意を得た。

プロジェクトの経過

以下ではプロジェクトの進行に伴い、どのような変化がみられたのかを検討していく。まず、Mull Note への投稿数の推移を検討し、参加者の初期と最後の投稿の比較、春学期、秋学期とも比較的多くかつ持続的に投稿した参加者2名を取り上げ、投稿内容の推移を検討する。最後に、これらの結果に関連するインタビューの結果を提示する。

1. Mull Note への投稿数の推移

表2、3はゼミ実施日から次のゼミ実施日前日までの1週間の投稿数、1人当りの投稿数、のべ投稿者数、ユニーク投稿者数、ユニーク投稿者1人当りの投稿数の推移を春学期、秋学期のそれぞれでまとめたものである。

春学期の平均投稿数は7.0回/週であり、平均のべ投稿者数は5.3人/週、投稿者1名当たりの平均投稿数は1.3回/週であった。平均すると1日1回の投稿があったことになる（4月5日から7月18日105日間の投稿総数は96回、1日当たりの投稿数は0.9回）が、第1回から第4回の週における投稿が、投稿者数とともに多く、その後、5回から7回の範囲に落ち着いている。

秋学期の平均投稿数は5.0回/週であり、平均のべ投稿者数は3.8人/週、投稿者1名当たりの平均投稿数は1.3回/週であった。春学期より投稿数が減少している（9月20日から12月5日77日間の投稿総数は62回、1日辺りの投稿数は0.8回）が、春学期の投稿数より有意な低下を示すものではなかった（集計日数の差異を考慮して投稿数の差異を検討したところ有意差はなかった。直接確率計算： $p = .243$ （片側））。春学期同様、学期開始時の投稿数が比較的多く、その後、0回から5回の範囲となっている。

表2 Mull Note への投稿数、投稿者数の推移（春学期）

ゼミ週	投稿数	のべ投稿者数	1人当り	ユニーク投稿者数	ユニーク1人当り
1回 4月5日～4月11日	17	13	1.3	7	2.4
2回 4月12日～4月18日	16	11	1.5	6	2.7
3回 4月19日～4月25日	7	6	1.2	2	3.5
4回 4月25日～5月9日	12	9	1.3	7	1.7
5回 5月10日～5月16日	5	4	1.3	3	1.7
6回 5月17日～5月23日	5	3	1.7	3	1.7
7回 5月24日～5月30日	4	3	1.3	2	2.0
8回 5月31日～6月6日	5	4	1.3	2	2.5
9回 6月7日～6月13日	7	4	1.8	3	2.3
10回 6月14日～6月20日	4	3	1.3	2	2.0
11回 6月21日～6月27日	3	3	1.0	3	1.0
12回 6月28日～7月4日	10	8	1.3	5	2.0
13回 7月5日～7月18日	1	1	1.0	1	1.0
14回 7月19日～7月25日	2	2	1.0	2	1.0
平均	7.0	5.3	1.3	3.4	2.0
4月5日～7月18日(105日)	96				
一日当り	0.9				

表3 Mull Note への投稿数、投稿者数の推移（秋学期）

ゼミ週	投稿数	のべ投稿者数	1人当り	ユニーク投稿者数	ユニーク1人当り
1回 9月20日～9月26日	11	10	1.1	7	1.6
2回 9月27日～10月3日	11	7	1.6	5	2.2
3回 10月4日～10月10日	7	7	1.0	4	1.8
4日 10月11日～10月17日	8	4	2.0	3	2.7
5回 10月18日～10月24日	7	5	1.4	4	1.8
6回 10月25日～10月30日	7	4	1.8	3	2.3
7回 11月1日～11月7日	2	2	1.0	2	1.0
8回 11月8日～11月14日	1	1	1.0	1	1.0
9回 11月15日～11月21日	5	4	1.3	3	1.7
10回 11月22日～11月28日	2	1	2.0	1	2.0
11回 11月19日～12月5日	1	1	1.0	1	1.0
12回 12月6日～1月9日	2	2	1.0	2	1.0
13回 1月10日～1月16日	0	0	0.0	0	0.0
平均	4.9	3.7	1.2	2.8	1.5
9月20日～12月5日(77日)	62				
一日当り	0.8				

表4 参加者毎の投稿数の変化

参加者	春学期	秋学期
A	5	1
B	0	0
C	1	4
D	5	4
E	11	8
F	0	0
G	1	2
H	33	14
I	4	0
J	1	2
K	4	5
L	2	3
M	7	5
平均	5.7	3.7
SD	8.44	3.75

注) 一日に複数回投稿の場合は1回とした

表4は、学期中の各参加者の投稿総数を示したものである。13名中11名が少なくとも1回は投稿を行ない、そのうち1名は頻繁に投稿する参加者であり、6名が4回から11回と2週に1回程度投稿する参加者、残り4名が投稿1回、2回の参加者であった。参加者間で、投稿へ積極的な学生、非積極的な学生が存在していた。

また、表4によれば、秋学期は13名中10名が少なくとも1回は投稿を行っていた。このうち、春学期と同じ1名が14回と比較的頻繁に投稿し、5名が4回から8回の投稿であり、4名が1回から3回の投稿であった。投稿回数0の内、2名は春学期と同じ参加者であり、1名は春学期4回の投稿があった参加者であった。春学期と秋学期間での参加者毎の投稿の変化は、投稿が減少した参加者6名、投稿が増加した参加者5名であり、全体として増減には差異がみられなかった。

図1、2はそれぞれ春学期、秋学期期間中の各日毎の投稿数の推移を示したものである。先に述べたように、各学期とも学期開始当初は投稿数が多く、その後減少していることがわかる。

ゼミのある日前後において、投稿数の増加があるかどうかを検討するため、ゼミ前後3日間と、ゼミ間3日間の投稿数を連休等除き週毎に集計したものが表5、6である。春学期、秋学期ともゼミ前後3日間とゼミ間3日間の投稿数総数には有意差は見られなかった（直接確率計算：春学期： $p = .148$ （両側）、秋学期： $p = .121$ （両側））。

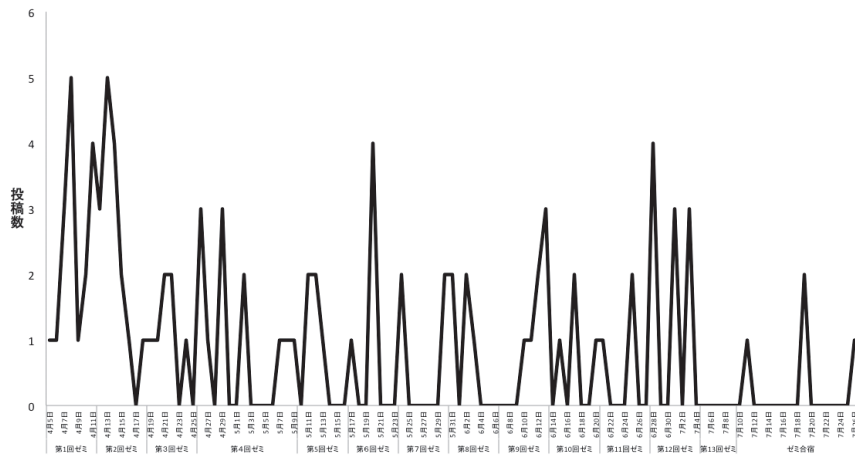


図1 投稿数の推移 (2011.4.5-2011.7.27)

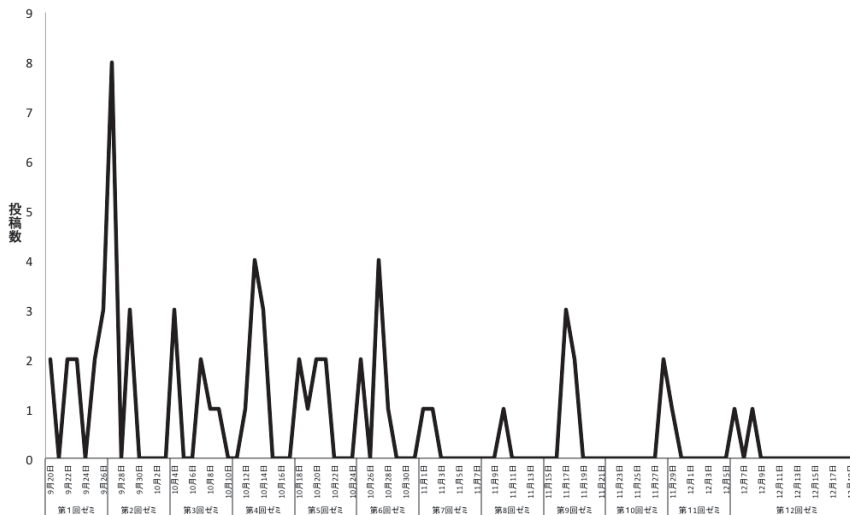


図2 投稿数の推移 (2011.9.20-2011.12.20)

ゼミ	ゼミ日前後2日	後週中3日
第2回	12	3
第3回	3	3
第5回	3	1
第6回	1	4
第7回	2	0
第8回	4	1
第9回	0	1
第10回	4	2
第11回	2	2
第12回	4	6
合計	35	23

ゼミ	ゼミ日前後2日	後週中3日
第2回	11	0
第3回	3	4
第4回	1	3
第5回	3	2
第6回	2	1
第7回	2	0
第8回	0	0
第9回	0	2
第10回	0	0
第11回	0	0
合計	22	12

2. Mull Note への投稿内容の変化

ここでは Mull Note への投稿内容の変化を、まず、全参加者の初期の投稿⁶⁾と最後の投稿に注目して検討する。次に、投稿数が春学期、秋学期と安定して比較的多い2名（表4中のE、M）に焦点を置いて、投稿内容の推移を検討する⁷⁾。

表7は参加者（英記号は表4に対応する。数字は当該参加者ののべ投稿数を示す）の投稿日、投稿時のコメント、視点を示したものである。投稿は主として携帯電話もしくは携帯情報端末によって撮影された写真として送信され、これに参加者のコメントが付されている。プライバシーの保護の観点から、写真の掲載はせず、写真の概要を文章で記載している。また、一部コメントを修正している（括弧付き）。

視点は、投稿者のコメントおよび投稿内容より、投稿者が投稿した表現にどのような関心をもったのかを特定したものである。後に詳細を検討する2名の投稿を含めて、視点として、「表現」、「表現の機能」、「機能」、「文脈と表現の一貫性」、「表現間の一貫性」、「表現の複合性」、「表現の解釈」、「表現の可能性」の8種類を特定した。

表現とは、投稿内容の表現の面白さ、巧みさ、悪さ、矛盾、分かりにくさ等、表現それ自体に関心をおいたものである（例：E2の時刻表示17:70の間違い）。表現の機能とは、投稿内容の表現が果たす機能や意味の冗長性や矛盾に関心をおいたものである（例：A5の楽譜であるのに音符が読めない表記となっている）。機能とは、表現というより、モノ、仕組みの機能の矛盾に関心をおいたものである（例：D2の開け口が表示の下になる容器）。文脈と表現の一貫性とは、投稿された表現が、その表現が使用される文脈と一致していないことに関心をおいたものである（例：G3の通常日本語の小説というジャンルは縦書きであるのに携帯小説は横書きであることへの違和感）。表現間の一貫性とは、投稿された表現物内の複数の表現間（箇条書きの各文の間、文と絵の間等）の関係に関心をおいたものである（例：表9M7の効能書きの各効能カテゴリー間の非一貫性）。表現の複合性とは、ある表現が複数の機能をもっていることへ関心をおいたものである（例：D9の毛筆の読みやすさという認知的側面と可愛らしさという感情的側面への関心）。表現の解釈とは、投稿された表現に複数の解釈の可能性があることに関心をおいたものである（例：E18のポスター中のコピーのアナタとワタシの関係が逆と考えることも可能である）。表現の可能性とは、投稿された表現が別の表現の可能性の中から選択されていることに関心をおいたことが示唆されるものである（例：M13 エネルギー会議という、参加者が大人と思われる状況に、赤ちゃんを登場させたことにより、「第三者視点、かつ弱者視点」が作られ説得力が増すとコメントしている）⁸⁾。

全体として、初期の投稿は、視点が表現自体に向けられたものが多いことがわかる。最後の投稿日は、参加者により、春学期の者、秋学期開始時期の者、秋学期中程度の者、秋学期後半の者など、幅があり、また、その視点にも幅があるが、春学期のごく初期に4回投稿したのみであった参加者Iを除いて、参加者の投稿内容には視点の変化が見られた。変化の方向は、表現自体への関心から、表現の機能、表現の解釈といった表現されている意味へ向けられた場合、文脈と表現の一貫性のように、表現とその周囲との関係へ関心を広げた場合、さらに、表現の意味がどのように作られているのか、表現の可能性へ関心を広げた場合のように、表現の“厚み”への関心が広がっていた。

この変化がどのような推移であるのかを詳細に検討するため、投稿が春学期、秋学期と持続して比較

表7 全参加者の初期と最後の投稿内容

No	投稿日	参加者によるコメント	投稿内容概要	視点
A2	2011.4.27	どうなってるの？	駆け込み乗車は危険ですという掲示の絵の足の長さの違い	表現
A5	2011.9.22	読めない楽譜	音符が示されていない楽譜	表現の機能
B	投稿なし			-
C1	2011.4.9	美味しいのか？	鹿煎餅に群がる鹿を経験して	機能
C5	2011.11.17	ゆるキャラだったのか！なんかこの子怖い	商店街のキャラクター展示	文脈と表現の一貫性
D2	2011.4.15	おもしろい	容器の開け口が印刷面から見て下側	機能
D9	2011.11.18	漢字もひらがなも同じ大きさを書かれていて読みにくいけど、なんとなく可愛い。	浮世絵の絵中に毛筆で文章が書き込まれている	表現の複合性
E2	2011.4.14	いやいや！	掲示の時刻表示「12:00～17:70」	表現
E20	2011.11.29	これで果たして〇ゼミをやりたくなるのか	通信教育のマンガ広告	表現の解釈
F	投稿なし			-
G1	2011.4.18	高い？安い？	タバコの自販機に貼られている「たばこ免許証で買えます！」という掲示	表現
G3	2011.10.7	小説なのに横書きってなんか違和感がある。携帯小説の不思議	(文章による投稿のため画像なし)	文脈と表現の一貫性
H14	2011.4.13	まっすぐ	縦線の模様が入ったビルの側面	表現
H46	2011.11.27	「じんわりおいしい」ってどんな感じ？	健康飲料の広告コピー	表現の解釈
I2	2011.4.12	この表面についてる×印(十字の形)は不思議だなと思って、写メしました。	灯油容器(ポリタンク)	表現
I4	2011.4.16	怖い	道路上に長靴が差し込んであるカラーコーンが並べてあり、足が道路から突き出ているように見える	表現
J1	2011.4.26	座るべきか座らざるべきか...	歩道に置いてある事務椅子	機能
J3	2011.10.27	「昔はよかった」とはよく言うけれど、あれって何がそう感じさせるんだろう。思い出補正？	(文章による投稿のため画像なし)	表現の解釈
K1	2011.4.13	うーん..読めない	篆書の文字	表現
K9	2011.12.6	顔につけなくても...でも確かに気になって見てしまう	マネキンの顔部分に商品ロゴがかぶせてある	表現の可能性
L1	2011.4.12	ホワイトサンダー	「白いブラックサンダー」という菓子	表現
L5	2011.10.8	(大学)前の道路を歩くとき、なぜかみんないつも左側通行な気がする。歩行者は右側なはずなのに何でだろう？	(文章による投稿のため画像なし)	機能
M2	2011.5.8	少なさがわかる	電車の時刻表中の発車時刻間の間隔	表現
M13	2011.10.25	第3者視点、かつ弱者視点だと説得力がある	「たのむよ大人！第一回赤ちゃんエネルギー会議」とタイトルをつけられたガス会社の広告	表現の可能性

初期の投稿は表現・説明に焦点化するよう指示した第2回ゼミ(2011.4.12)以降のものを原則として掲載

的多い参加者 E と M を取り上げる。表 8、9 は参加者 E、M の投稿内容の概要を示したものである。

参加者 E、M とも初期の投稿では、表現の巧みさ、あるいは、悪さという視点から、対象を選択し、投稿していることがわかる（E1, 2, 3, 7, M1, 2）。たとえば、参加者 M による最初の投稿（M1）は、鎮痛消炎剤の広告ポスター内のコピー内容とこれを表現するフォントの形状の一致（「ガチ肩」という言葉を 3D 様の文字を鎖で縛ったフォント）をもって、「わかりやすい」という形容が与えられている⁹⁾。

次に、参加者の視点は、表現の一貫性（現実と表現の間、あるいは、ひとつの表現物内の表現間）へと移行している。参加者 E は、現実とその説明表現との不一致（たとえば、E4「反対方向……」）として把握される一貫性に関心を持ち（E4, 5, 6, 9, 10）、その後、表現内の項目間の一貫性へと関心を移行させている（E11, 12）。一方、参加者 M には、現実と表現との一貫性への関心はみられず、表現物内の表現間の一貫性への関心がみられた（M6, 7）。たとえば、M7 では清涼飲料水の効能表示の内容（キレイ成分：ビタミン C、元気成分：クエン酸、話題の成分：レモンポリフェノール、キレイ成分：ヒアルロン酸）に対して、「3つ目の成分の効果がわからない」という問題を指摘している。

秋学期に入ると、参加者 E、M ともに視点が表現の解釈へと移行している（E17, 18, 19, 20, M8, 9, 10, 11）。表現の解釈という視点は、たとえば、参加者 E の 10 月 18 日の投稿（E18）に見られるように、表現（募集ポスターのコピー文「アナタの思いをワタシが届ける」）に対して、参加者の視点から別の解釈（アナタとワタシが逆では？）が可能であることを指摘したものである。参加者 M はその後、同じ内容を異なって表現する可能性への視点を示すようになった（M12, 13）。たとえば、M12 では、同じキャラクターの絵が異なるタッチの線種で描かれることによる印象の違いを指摘している。表現の目的に関する関心（表現の機能）は、参加者 E では秋学期に見られ（E13, 16）、参加者 M では春学期に見られた（M4, 5）。

まとめると、全体として、視点は、ある特定の表現自体から、表現内の関係、表現と文脈との関係へ、さらに表現解釈の広がりへと向かい、複数の表現可能性へと移行していることが示唆される結果が得られた。

表8 投稿内容の推移（参加者E）

No	投稿日	参加者によるコメント	投稿内容概要	視点
E1	2011.4.8	設置して最後に確認しなかったのか	店内表示「15年周感謝・・・」	表現
E2	2011.4.14	いやいや！	掲示の時刻表示「12:00～17:70」	表現
E3	2011.4.20	どっちなの	プリクラの幕表示Looney Tunesの上に「ハローキティ」の張り紙	表現
E4	2011.4.22	反対方向・・・	電柱の店舗案内表示。矢印とは逆の方向に該当店舗	文脈と表現の一貫性
E5	2011.5.13	こりゃやばい	黒い色をした白みそ	文脈と表現の一貫性
E6	2011.5.30	除外しすぎ	商品棚のCDの多くに「Sale 除外品」のシール	文脈と表現の一貫性
E7	2011.6.11	飛ばなそう	看板表示「ちょっとだけ暑さが吹きどびます。」	表現
E8	2011.6.12	ターゲットは	大手スーパーのホワイトビズの広告中のジャニーズ系のタレント	表現間の一貫性
E9		シンプルいずベスト？	衣料品店内にある小さい可動式のサービスカウンターと表示された机	文脈と表現の一貫性
E10	2011.6.21	どうしようもない	券売機に貼られた「10円玉が不足しています」「100円玉不足しています」の張り紙	文脈と表現の一貫性
E11		平等じゃない	マンガのブックカバーの絵	表現間の一貫性
E12	2011.7.1	アバウト	お米の産地がわかります！という台紙に「当店のご飯はすべて、国産のお米を使用しています。」という表示	表現間の一貫性
E13	2011.9.26	言われなくてもしほりだすと思うが	「味噌おでん用みそたれ」の袋にある「よくしほり出して、お使い下さい」の表示	表現の機能
E14	2011.9.27	何故下のフィルムははずさないのか？	開けたタバコの包装ビニル	機能
E15	2011.9.29	高速道路のETC. あれは渋滞を緩和する為のシステムなのにほぼ停止状態ぐらいにスピードを落として通過していたら渋滞緩和できるかどうか怪しい。同じことがJRの改札でも言える	(文章による投稿のため画像なし)	機能
E16	2011.10.4	選択肢にする必要があるのか？	「最新のアプリケーションにバージョンアップできます。アップデートしますか？」という表示	表現の機能
E17	2011.10.9	不透明な部分が多すぎる	食品の原材料表示	表現の解釈
E18	2011.10.18	届けるのは「ワタシ」のほうではなくて雇われる「アナタ」のほうではないのか？	日本郵便の年末・年始アルバイト募集ポスターのコピー「アナタの思いをワタシが届ける」	表現の解釈
E19	2011.11.2	既存商品をリニューアルしたときに「改善しました」という言葉を使用する場面があるが、改善されたかどうかは消費者が決めることでは？ 実際改善されたかどうか怪しい場合もある。	(文章による投稿のため画像なし)	表現の解釈
E20	2011.11.29	これで果たして〇ゼミをやりたくなるのか	通信教育のマンガ広告	表現の解釈

表9 投稿内容の推移（参加者 M）

No	投稿日	参加者によるコメント	投稿内容概要	視点
M1	2011.4.11	わかりやすい	広告ポスターで使用されている表現内容とフォントの一致（「ガチ肩」という言葉の3D文字を、鎖で縛るフォント）	表現
M2	2011.5.8	少なさがわかる	電車の時刻表中の発車時刻間の間隔	表現
M3	2011.5.8	下が開け口とは	包装紙の開け口が印刷面から見て下側	機能
M4	2011.5.24	逆にする理由がわからない	電車路線図の南が上	表現の機能
M5		まずそんなとこ見ないよ	アイスクリームの包装紙に印刷されているフタの開け方の記述	表現の機能
M6	2011.6.13	でも思っちゃう	赤いケチャップ容器の先から黄色いマスタード様の物体が少しだけでている絵が描かれているポスターのコピー「これをケチャップだと思った方。先入観にとらわれないでください」	表現間の一貫性
M7		3つ目の成分の効果がわからない	飲料水の容器に書かれている効能表示。キレイ成分：ビタミンC、元気成分：クエン酸、話題の成分：レモンポリフェノール、キレイ成分：ヒルアロン酸	表現間の一貫性
M8		まだと思うかもうと思うか	階段1段1段に貼られている段数表示	表現の解釈
M9	2011.6.28	もちっ……？	もちっカスタードという商品名と実際の食感の違い	表現の解釈
M10	2011.7.19	飛び込んでる？	駅構内転落注意喚起ポスターの表現	表現の解釈
M11	2011.9.27	小枝の形をしていないのに小枝の名称で売られていても違和感がない	小枝ボールという商品の包装	表現の解釈
M12	2011.10.25	同じキャラクターなのに雰囲気が違う	同じキャラクターの異なるポスター。輪郭線の質が異なる。	表現の可能性
M13		第三者視点、かつ弱者視点だと説得力がある	「たのむよ大人！第一回赤ちゃんエネルギー会議」とタイトルをつけられたガス会社の広告	表現の可能性

3. インタビューの結果

インタビューは参加者13名中10名に実施することができた（表4のF, H, Iを除く10名）。ここではインタビューの回答から、本プロジェクトを通して、参加者が経験していたことを、上記の結果に関連して、投稿基準の曖昧さ、投稿の少なさ、参加者の変化の3点を中心にまとめる。

投稿基準の曖昧さ

Mull Note へのイメージについて質問したところ、投稿基準の曖昧さへの懸念を持っていたことが回答中に示されていた（引用中のアルファベットは表4中の参加者記号）。

「全然わからなかった。何やってるのかわからなくて、でも、気になることを探すのが難しく、何が気になるん

かが気になるみたいな。」(C)

「イメージ。何やろう、でも何か気になることを挙げてくださと言われてたけど、何かみんな、何か看板とか、そういう文字とかに、何かみんな結構いっぱい投稿してたら、そういうのじゃないとあかんのかなと思って。自分の投稿……しようもない……何かそういうのはありましたけど、何か。逆に自由過ぎてちょっとわからなかったかな、気になるもの……。」(K)

「ちょっと私は抵抗がありました。何か、これ、これで何か合ってるっていうか、いいのかなみたいな何か、何か全然、的外れなこと言っとったらどうしようみたいな感じのことを。」(L)

第2回ゼミにおいて、投稿対象を、気になる表現や説明に限定したが、関心を持つ視点には言及しなかったため、Mull Note への投稿に何が期待されているのか、手探りの状態であったことが伺える。この手探りの状態は、このプロジェクトがゼミ活動の中で実施されたことにより、以下に示す参加者 E、J の回答にあるように、参加者によっては、このことが解釈枠組みとなっていた。

「何か、勉強というか何かちょっとかたいイメージがあったというか、何か何をどう送っていいか、何をメモしていったらいいかちょっと迷いがあったというか、どのラインまでオーケーで、何かそのラインを越えてしまったらちょっとふざけ感が出てしまうかなと思って、ちょっと、どのライン、やっぱ授業というのが前提にあるから、授業で使えることを考え、どうしていいのかなみたいな、そこらちょっとありましたね。」(E)

「やる前やったら、気になるってのもどういふものを送ったらいいんやろうという。だから、卒論とかに使うんやったら、結構、何ていうか、心理学的に絡まないかんのかなという先入観もちょっと、最初は思っていました。」(J)

「何やった、初めトランスダクションとかの話したから、見え方とか送ったほうがいいんかなって初めすごいそれに、すごいじゃないけど、若干固執してて、でも何かそんな、めっちゃ軽いの送ってんけど、これ、真に関係あんのかなというよなのを送られてるの見て」(M)

ただし、この解釈枠は、進行とともに緩和される傾向にあった。

「今も、あんまり変わらないですけど、まあ前よりは、みんなの感じを見てたら、もうちょっと、ちょっとしたことでも送ったりしてる子もいたりしてたから、まあ、ああ、じゃあもうちょっと何か気軽に送ったらええかみたいな。」(E)

「今はそんなに、結構気にならないです。おもしろかったことぐらいのもよく投稿していたり、写真じゃなかったも投稿してたりするんで。もうちょっと軽い感じでよかったんかなという……。」(J)

「若干、敷居が低くなったぐらいで。」(M)

したがって、投稿基準の曖昧さは、全体と持続していたと考えることができる。このことは、一方で、投稿を控えることに繋がり、他方で、投稿基準、つまり、関心についての探索を持続させることになったと考えることができる。

投稿の少なさ

投稿数の少ない参加者に対して、その理由を尋ねたところ、次のような回答があった。

「そうですね。何かあんまり周りに注意を向けてないのかわかんないですけど、まあ気になることもあるんですけど、それを送らないんですね。」(B)

「何か気になることというか、例えばいろんな、机が全部向こう向いてる、何でやろうと思うんですけど、それ、そこで何か完結しちゃって送ろうとまではいかないんですよ。何でやろうと思うんですけど、撮ってまで送ろうと、ああ、でもそれほどじゃないかなという感じになってしまって。」(G)

「何か、ああ、そうかだけで終わってしまうんです。だから自分の意見があんまり、ああ、へえで終わってしまう感じですね。」(L)

いずれの参加者も、関心をもった対象がないのではなく、それを投稿するに至らなかったと回答している。このことは、先に示した通り、投稿基準が曖昧であったこととも関連するが、そもそも、投稿することによって何を得ることができるのかという目的の曖昧さを反映しているとも考えることができる。たとえば、参加者Bは次のように述べている。

「そうですね、でもまあ負担には全然なっていないと思うんですけど、何か送りっぱなしのことが結構多いじゃないですか。だから、それちょっとおもしろくないかなという。」(B)

「だれもコメントつけないから、何か。」(B)

「載せられたやつに関連して何か別のことを載せるとか。そうやってつないでいくみたいな。」(B)

参加者Bは、投稿に積極的にコメントをつけたり、テーマを持った投稿することが必要であると提案している。

また、投稿手段自体の問題も指摘されている。本プロジェクトでは、投稿の簡便さから、写真を主に利用したが、写真撮影することには一定の抵抗があると述べている。

「電車の中はすごい撮りづらい。」(A)

「何か、めっちゃ見られてるし、何か商品を撮って変なんに流してん違うとか思われそう。」(C)

「階段のところにある写真だったんですよ。だから、何か階段の通行妨げながら、やりながら撮るのも何かなと思って。」(L)

この抵抗も関心を持った対象が見つかったとしても、投稿に至らない理由のひとつと考えられる。一方で、撮影はしたが、関心の所在を明確にできないため投稿を控えた参加者も存在した。

「そうですね。何か送るときは、何かどこが気になったかというのがある程度わかってるものを送ってるんですけど、自分が持っているものは、何で気になったか全然わからないけど、保存しておこうというものが。」(D)

投稿時に気になった点をコメントするよう指示したが、気になることは言語では表現できないものもあることを示している。

参加者自身の変化

プロジェクトへの参加者について自身の変化について尋ねたところ、以下に示すように、関心自体を持つようになった、関心を持ったことを表現するという回答が得られた。

「でも、結構、周りにちょっと関心向けて、探すようになったかな。気になって。」(C)

「やっぱり僕、広告は見るようになって、色使いとかも見たりする。CMとかも、例えばチキンラーメンのCMで、パッケージやと黄色いじゃないですか。そのイメージなのか知らないですけど、そのCM中バックが全部黄色かったり、服装が茶色、何かチキンラーメンの茶色とかやったり、そういうふうなイメージしてつくってんのかなというふうには気になる感じはしましたね。気になるようになりました。」(G)

「何か、今までは何か気になっても、今もそんな特に言ってないんですけど、言う人がいないじゃないですか。何か特にそんなしょうもないことでも、何かここやったら言ってもいいんかなとは思いました、何か。」(L)

「無関心で歩いてたけど。ちょっとほんじゃあ、見てみようかなという。」(K)

「探してみればいろんなもんが見つかる。」(J)

さらに、比較的投稿数が多い参加者からは、関心の所在について探索するようになったという回答を得た¹⁰⁾。

「気になったことに対して、さらに何でこうなるのかと、もう1個考えるようになります。」(A)

「自分が何に興味があるのかなというのは考えるようになりました。」(D)

「気になっても、まあぐらいやったのが、気になったらちょっと調べて、撮って分析というか、こういうことなんやとか、ちょっと考えるようになりましたね。」(E)

「あれやな、何でやろと思えるようになった。今までやったらスルーしたことが、何でやろと思えるようになった。」(M)

参加者は投稿内容にも変化がみられたが、その変化に応じるように、認識も変化していることを示唆する結果である。

プロジェクトの成果

ここでは上述したプロジェクトの結果をもとに、本プロジェクトの成果を検討する。

Mull Note プロジェクトの目的は、学習者の日常に根ざした関心と科学的概念とを結びつけることである。この目的を実現するために、本プロジェクトでは、ターゲットとする科学的概念をマルチモーダリティ論とし、この論が描く世界へ参加しながら、その世界のあり方を探求する仕掛けとした。したがって、プロジェクト参加者に期待されることは、次の科学的概念に接近することができたかどうかということになる。すなわち、「経験の意味は多モードに表現される記号の生産から構成され、我々は、他者もしくは自らが生産した記号への応答として、自らの関心に基づき、多モードの記号を産出して、意味を生産している」と捉えることである。このことは、経験が何らかの表現によって構成され、その表現は選択されたものであるという認識を持つことと言い換えることができる。もちろん、研究室のテーマがマルチモーダリティ論であり、春学期のゼミ内の活動は、そのキー概念であるトランスダクションと呼ばれる表現間の変換を探索することであったため、概念は一定の知識としては提供されていたといえる。この点では、参加者は知識に触れているのであるが、ここで問題としたいのは、単に、言語的表現としての知識に触れることではなく、知識が指し示す概念によって構築されている世界に触れたのかということである。

上述したプロジェクトの結果によれば、年間を通じて、比較的多くの投稿を続けた参加者は、当初は、表現自体への注目であったものが、表現に伴う矛盾を経由して、表現の複数の解釈の可能性から、表現自体の選択的可能性への気づきと移行していることを示唆するものであった。他の参加者も、プロジェクト開始当初に投稿して以降、投稿していない参加者Iを除けば、一定の変化を示していた。インタビューによれば、投稿の多い参加者は、表現に発する関心の所在、関心の根拠へ注目するようになったと回答しており、投稿数の少ない参加者が、関心を持つようになったという回答であることと比較して、

より表現の選択的な生産という視点に接近していることが示唆される。

このような変化を説明する理論として、マルチモーダリティ論が立脚している Halliday の言語発達論を取り上げ検討する。Halliday (2004) は、子どもの初期言語 (proto language) から大人の言語への発達を層化の概念で捉える。初期言語は意味と表現 (記号) の二層構造から構成されており、ある特定の意味は、ある特定の記号によって表現される。このとき表現には共通した体系化は見られない。すなわち、意味も、それにとまなう表現も、バラバラであり、かつ、子ども各々独特である。これに対して大人の言語は、意味層と表現層の間に語彙文法という層が構成され、三層構造となる。語彙文法層は、意味表現において選択された語彙を諸語彙の関係の中に、また、選択された文法を諸文法関係の中に位置づける。その結果、バラバラでかつ、個人に独特であった意味と表現に共通の構造が与えられることになる。つまり、経験に共通する構造が与えられるのである。また、語彙文法層により、大人の言語は“同じ”意味を異なる表現で表すことが可能となり、意味構成の可能性が飛躍的に拡大する。

この観点からすると、子どもの初期言語によって構成される世界は、表現から意味が透けて見えている世界である。表現の背後に異なる意味の可能性を見出すことはない。意味は理解できるか、理解できないかのどちらかである。そのような世界は、いわば、“素朴で”自然な世界である。そこに疑問を挟む余地はない。一方、大人の言語によって構成される世界は複雑であり、表現の解釈が必要となる世界である。

比較的多くの投稿を行なった参加者の変化は、この初期言語から大人の言語への発達に符合するように考えられる。もちろん、言語発達という個体発生をそのまま数ヶ月の変化に適用することには慎重であらねばならない。Halliday の言語発達論の中で注目したい点は、意味と表現とが一对に結びついている状態から、意味と表現との間に語彙文法という体系が創発するという点である。層化の議論は、言語を対象に形成されてきたが、近年、言語以外の記号表現にも適用されつつあり (たとえば, Jewitt, 2009; O'Halloran & Smith, 2011)、言語の語彙文法層に相当する層の検討が行なわれている。参加者はこの層化された多様な記号による意味表現のあり方に自らの関心を通して接近しつつあると考えることができる。

このとき、注目したい点は、2人の参加者が、文脈と表現の一貫性、そして表現間の一貫性への関心を経由していることである。つまり、ある文脈が要請している意味と、そのような文脈において表現によって形成される意味との不連続性、また、同じ枠組み内の異なる表現によって形成される意味間の不連続性への関心である。文脈と表現の不連続性の認識は、異なる表現可能性を認識するための契機である。しかし、これのみでは、同じ枠組み内の異なる表現によって形成される意味間の不連続性の認識には結びつかない。もうひとつの契機が必要である。意味が複数の領域から形成されているという認識である。

意味の多重性は、Halliday の理論では、メタ機能と呼ばれ、観念構成機能、対人関係機能、テキスト形成機能の3つの意味領域が提案されている (Halliday & Matthiessen, 2004)。観念構成機能は、出来事に関係する意味である、対人関係機能は表現者と受け手との関係、表現者と表現との関係に関する意味である。テキスト形成機能は、表現の一貫性に関する意味である。

同じ意味で異なる表現という場合のひとつのあり方は、観念構成機能は同じであるが、対人関係機能

は異なるというものである。たとえば、参加者 M が M13 で指摘したものは、エネルギー会議という観念構成は同じとして、大人ではなく、赤ちゃんをその出席者とすることで、対人関係機能を変化させている（弱者視点で説得力を持たせる）と捉えることができる。

意味の多重性は、参加者 D が示した意味の複合性という視点である。参加者 D が示した複合性は、Halliday の区分によるなら、観念構成機能と対人関係機能が毛筆という文字の形によって具現していることを指し示すものである。詳細を検討した 2 名の参加者は参加者 D が示した表現の複合性と同様の視点は特定されていないが、表現間の一貫性という視点は、テキスト形成機能に関係しており、表現の観念構成機能とテキスト形成機能を分離して捉えることを含み持つと考えられる。参加者 E と M は表現に関係する一貫性をエントリーポイントとして、意味の多重性と選択可能性を切り開きつつあるものと考えられる。

参加者が収集した気になることは、参加者が日常生活において常時目にしてしているものである。本プロジェクトの結果は、単に目にしていただけでは、変化は生じないことを示唆している。気になるという関心を持ち、それを表現し続けることが、変化の契機となる。マルチモーダリティ論が主張する「他者もしくは自らが生産した記号への応答として、自らの関心に基づき、多モードの記号を産出して、意味を生産」することが必要なのである。

経験を構成している表現が、そのまま「意味ある」と捉えるのではなく、可能な表現、可能な意味の選択の結果であると捉えることは、田島（2010）の言うところの「わかったつもり」となっている自動化した日常世界の経験を自覚し、かつ随意的な世界の構築へと向かう契機となるものである。すなわち、自らの日常経験を対象化し、そこに意味形成の作用を見だし、これを理論化して、選択的に関わろうとすることである。この作業は、まさに、マルチモーダリティ論が行おうとしていることであり、本プロジェクトにおいて、日常生活における表現への関心を生産してきた参加者が切り開こうとしている“理論的”経験である。

今後の課題

本稿では、Mull Note プロジェクトの結果の概要報告を中心に行なってきた。今後、得られたデータを更に分析すること、特に、参加者が投稿した写真表現のより緻密な分析を行ない、本稿において素描した変化が確かなものであるのかを検討する作業が残されている。その中で、参加者が示した意味形成の理論（語彙文法）がどのようなものであるかを明らかにする必要がある。

また、参加者が示した変化が一般化可能なものであるのかを検討する必要がある。まず、参加者がプロジェクト内で示した志向性をプロジェクト外でも維持するかどうかという点があげられる。この時、参加者の関心は一定程度維持していたが、投稿という生産に結びつけることができないことの検討が重要となると考える。インタビューからは、本プロジェクトの目的の曖昧性が示唆されている。世界に対する関心の生産を持続させる目的を探らねばならない。もうひとつは、変化の展開が他の科学領域においても共通して適用可能なものであるかという点である。本プロジェクトは、マルチモーダリティ論をターゲットとしたが、他の科学領域においても、同様のプロジェクトを企図することが可能あるかどうか

かを含めて考える必要がある。最初に述べたように、現代の世界は、自然科学理論を畳み込んだ人工物が溢れている世界でもある。ならば、その人工物の生産において使用されている理論に、人工物を通して接近する可能性もあるのではないだろうか。

これらの検討の上で、本プロジェクトの方法の一般化を通して、日常経験と科学的概念とを組織化する学習活動モデルの構築を行なうことが重要な課題である。

注

- 1) Wartofsky (1979) の人工物 (artifacts) の議論を参照のこと。
- 2) もちろん、社会的実践の目標を統合する戦略もある。
- 3) 「友人の声」も名詞化の結果である。議論の詳細は Matthiessen (1998) を参照のこと。
- 4) Mull には熟考する (think about deeply and at length: OED) という意味がある。
- 5) マルチモーダリティ論は、記号学、言語学を基盤としており、ここで言う科学は人文社会科学という意味である。本プロジェクトにおける方法が自然科学的概念とどのように結びつきを持つことが可能であるかという検討は今後の課題である。
- 6) 初期の投稿とは、投稿内容を気になる表現や説明に焦点化した第2回ゼミ (2011.4.12) 以降に投稿された最初の投稿を対象としている。第2回ゼミ以降に投稿がない、あるいは投稿が最後の投稿となった参加者の場合は、第2回ゼミ以前の投稿を掲載した。
- 7) 最も投稿数の多い参加者 H に対してインタビューを実施できなかったため、次に投稿数の多い参加者 E と M を検討対象とした。
- 8) もしこの投稿に「面白い」というコメントのみが示されているなら、そこでの関心は「文脈と表現の一貫性」と解釈される。
- 9) 製薬会社の WebPag に掲載されている広告撮影エピソードには以下の説明がある。
『『肩の痛み』をどのように表現するか……
関係者一同が悩みぬいてたどり着いた言葉が、
ガチガチにコリ固まったつらさの『ガチ肩』、
バリバリに固くこわばった痛みの『バリ肩』。
普段この痛みを持つ方たちには直感的に伝わる言葉を、ビジュアル面のインパクトとともに表現』
(第一三共ヘルスケア CM ギャラリー <http://www.daiichisankyo-hc.co.jp/tvcm/cm_patecs_felbinastar.html> (2012年2月3日))
- 10) 参加者 A は春学期比較的多くの投稿をしていたが、基本的に忙しく投稿せずもっぱら投稿をみるのみだったとインタビューで回答している。

引用・参考文献

- フルッサー, V. 深川雅文訳 (1999). 『写真の哲学のために』 勁草書房
- Halliday, M.A.K. (1998). Things and Relations: Regrammaticising Experience as Technical Knowledge. In J.R.Martin and R.Veel (eds.) *Reading Science: Critical and Functional Perspectives on Discourse of Science*. London and New York: Routledge. (e-book edition). (pp.185-236)
- Halliday, M.A.K. (2004). On Grammar as the Driving Force from Primary to Higher-Order Consciousness. In Williams, G., and Lukin, A. (eds.) *The Development of Language: Functional Perspectives on Species and Individuals*.

- London and New York: Continuum. (pp.45-90)
- Halliday, M.A.K. and Matthiessen, M.I.M.C. (1999). *Construing Experience through Meaning: A Language-based Approach to Cognition*. London and New York: Continuum.
- Halliday, M.A.K. and Matthiessen, M.I.M.C. (2004). *An Introduction to Functional Grammar: 3rd Edition*. London and New York: Arnold.
- Jewitt, C. (2009). *The Routledge Handbook of Multimodal analysis*. London and New York: Routledge
- Kress, G. (2009). *Multimodality: A social semiotic approach to contemporary communication*. London and New York: Routledge. (e-book edition)
- Matthiessen, M.I.M.C. (1998). Construing Processes of Consciousness: From the Commonsense Model to the Uncommonsense model of Cognitive Science. In J.R.Martin and R.Veel (eds.) *Reading Science: Critical and Functional Perspectives on Discourse of Science*. London and New York: Routledge. (e-book edition). (pp.329-358)
- O'Halloran, K. and Smith, B.A. (2011). *Multimodal Studies: Exploring issues and domains*. New York and London: Routledge.
- 田島充士. (2010). 『分かったつもり』をどのように捉えるか：ヴィゴツキーおよびヤクビンスキーのモノローグ論から」
ヴィゴツキー学. 別巻, 1, 1-16.
- ヴィンセント, D. (2011). 北本正章監訳『マス・リテラシーの時代 近代ヨーロッパにおける読み書きの普及と教育』
新曜社.
- ヴィゴツキー, L.S. (2001). 柴田義松訳『新訳版 思考と言語』新読書社.
- Wartofsky, M.W. (1979). *Models, representation and scientific understanding*. Boston:Reidel.

